

令和5年度の病害虫発生に関する情報

徳島県

(徳島県農林水産部みどり戦略推進課 田村 収)

1. 新病害虫の発生

(1) トマトキバガ (令和5年7月21日特殊報)

令和5年6月30日、徳島県阿波市のトマト栽培ほ場周辺に設置したトマトキバガの侵入調査用のフェロモントラップにおいて、誘殺された蛾の成虫を神戸植物防疫所に同定依頼した結果、本県では未発生のトマトキバガであることが判明した。現在のところ、県内では農作物における発生及び被害は確認されていない。

(2) レタス疫病 (令和5年10月20日特殊報)

令和5年1月、徳島県阿波市のレタスにおいて収穫前の株が萎凋する症状が発生した。徳島県立農林水産総合技術支援センター病害虫防除所で分離し、東海国立大学機構 岐阜大学に同定を依頼したところ、本県では未発生の *Phytophthora pseudolactucae* によるレタス疫病と判明した。本病は主に厳寒期(1~3月)のトンネル栽培の作型に発生し、髓部を侵し、萎凋症状を呈する。

2. 水稻

(1) いもち病

梅雨入りは5月29日と平年(6月5日)より早かったが、6月2~5半旬までの降水量が65.0mmと平年の半分量しか降雨が無く、早期作では葉いもちは、平年より遅い6月6半旬より発生を認め、7月3半旬まで発生圃場率が22.2~55.6%、発病度が1.1~3.4と、平年(20.4~38.4%, 0.9~2.9)並であった。穂いもちは、平年並の7月6半旬より発生を認め、8月3半旬まで発生圃場率が22.2~38.9%、発病穂率が0.1~0.4%と、平年(16.1~25.6%, 0.1~0.3%)並であった。

普通期作では葉いもちは、早期作と同様に平年より遅い6月6半旬より発生を認め、7月6半旬まで発生圃場率が13.3~52.2%、発病度が0.1~3.1と、平年(5.6~51.3%, 0.2~4.6)並であった。穂いもちは、平年並の8月3半旬より発生を認め、9月3半旬まで発生圃場率が8.7~40.0%、発病穂率が0.0~0.3%と、平年(9.7~38.7%, 0.1~0.5%)並であった。

(2) 紋枯病

早期作では、平年より遅い7月3半旬より発生を認め、8月3半旬まで発生圃場率が11.1~22.2%、発病度が0.1~0.6と、平年(17.4~28.2%, 1.0~2.0)並であった。

普通期作では、平年よりやや遅い7月6半旬より発生を認め、9月3半旬まで発生圃場率が30.0~64.7%、発病度が3.5~5.1と、平年(69.8~70.0%, 5.9~7.2)並であった。

(3) 縞葉枯病

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(4) 稲こうじ病

県西部の普通期作で、平年並の9月3半旬に発生を認め、発生圃場率が12.5%、発病株率が5.6%と、平年(12.6%, 4.2%)並であった。

(5) ヒメトビウンカ

早期作では、平年並の6月3半旬より発生を認め、7月6半旬まで発生圃場率が22.2~50.0%、株当たり虫数が0.0~0.1頭と、平年(4.6~54.1%, 0.0~0.1頭)並であった。

普通期作では、平年並の6月3半旬より発生を認め、8月6半旬まで発生圃場率が23.5~82.6%、株当たり虫数が0.0~0.2頭と、平年(10.2~89.3%, 0.0~0.6頭)並であった。

(6) セジロウンカ

早期作では、平年並の6月3半旬より発生を認め、8月3半旬まで発生圃場率が22.7~77.8%と、平年(3.1~52.0%)に比べてやや高かったが、株当たり虫数は0.0~0.1頭と、平年(0.0~0.1頭)並であった。

普通期作では、平年よりやや遅い6月6半旬より発生を認め、8月6半旬まで発生圃場率が13.0~47.8%、株当たり虫数が0.0~0.2頭と、平年(14.7~74.5%, 0.0~0.4頭)に比べてやや低かった。

(7) トビイロウンカ

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(8) 斑点米カメムシ類

早期作では、平年並の6月6半旬より発生を認め、7月3半旬までの水田周辺雑草地における発生地点率が33.3~44.4%、寄生虫数(20回振り)が1.3

～2.2頭と、平年(58.0～59.6%, 5.4～6.2頭)に比べてやや低かった。その後の本田調査では、平年並の7月6半旬より発生を認め、8月3半旬まで発生圃場率が38.9～44.4%、寄生虫数(20回振り)が0.6～0.9頭と、平年(33.5～43.7%, 0.7～1.1頭)並であった。

普通期作では、平年並の7月3半旬より発生を認め、7月6半旬までの水田周辺雑草地における発生地点率が87.0%、寄生虫数(20回振り)が13.7～13.8頭と、平年(67.9～72.5%, 8.0～8.1頭)並であった。その後の本田調査においては、平年並の8月3半旬より発生を認め、9月3半旬まで発生圃場率が23.5～70.0%、寄生虫数(20回振り)が0.9～5.0頭と、平年(45.3～46.9%, 1.6～2.2頭)並であった。

(9) コブノメイガ

早期作では、発生は認められなかった。

普通期作では、平年より遅い8月6半旬より発生を認め、9月3半旬まで、発生圃場率が0.0～11.8%、被害葉率が0.0%と、平年(21.2～23.7%, 0.7～0.8%)に比べて低かった。

3. 果樹

(1) 果樹共通・カメムシ類

2月に実施したチャバネアオカメムシの越冬調査(11地点×2か所調査)では、6地点で越冬を確認した。越冬成虫は0.6頭/m²であり、平年(2.6頭/m²)に比べやや低い越冬密度であった。

予察灯における初誘殺は、上板町では平年より9日早い4月12日に、勝浦町では平年より8日遅い4月29日に、ツヤアオカメムシの初誘殺を確認した。

上板町での誘殺数は、10月1半旬までは平年に比べてやや少なく推移していたが、その後増加し、10～11月におけるツヤアオカメムシは平年に比べて2.8倍多かった。一方、チャバネアオカメムシは平年並に推移した。

勝浦町での誘殺数は、11月6半旬まで平年に比べてやや少なく推移した。

(2) かんきつ(温州みかん, すだち)・そうか病

3月4半旬の温州みかん圃場における旧葉での越冬病斑発生圃場率が37.5%、発病度が0.1と、平年(34.2%, 0.3)並であった。その後、春葉での発病は、平年並の5月3半旬より認め、8月3半旬まで温州みかん及びすだちにおける発生圃場率が18.8～37.5%、発病度が0.1～0.5と、平年(7.5～23.4%, 0.1～0.3)並であった。果実での発病は、平年並の

6月3半旬より認め、8月3半旬まで発生圃場率が31.3～37.5%、発病度が0.1～0.2と、平年(19.7～36.9%, 0.3～0.9)に比べてやや低かった。

(3) かんきつ(温州みかんのみ)・黒点病

5月3半旬に調査した枯れ枝から黒点病菌が確認された圃場率は37.5%で、枯れ枝中のα型孢子数は0.5～1.5×10⁵個/mLであった(前年:50.0%, 0.8～2.7×10⁵個/mL)。

11月3半旬の果実での発生圃場率は87.5%、発病度は6.2と、平年(82.8%, 4.9)並であった。

(4) かんきつ(すだちのみ)・かいよう病

5月3半旬の旧葉での発生圃場率が100%と、平年(66.4%)に比べてやや高かったが、発病度は1.7と、平年(2.3)並であった。

春葉では平年並の6月3半旬に発生を認め、発生圃場率が87.5%と、平年(78.3%)並であったが、発病度は3.9と、平年(1.6)に比べてやや高かった。一方、果実では、8月3半旬の発生圃場率が75.0%、発病度が2.6と、平年(89.8%, 4.0)並であった。

(5) かんきつ・ミカンハダニ

旧葉における発生は、5月3半旬では発生圃場率が56.3%、寄生葉率が13.6%と、平年(46.3%, 7.8%)に比べてやや高かった。

春葉での発生は、平年並の6月3半旬より発生を認め、11月3半旬まで発生圃場率が50.0～87.5%、寄生葉率が1.9～7.6%と、平年(50.4～81.1%, 4.2～10.5%)並であった。

(6) なし・黒星病

葉における発生は、平年より遅い6月6半旬に発生を認め、発生圃場率が12.5%であった。発病葉率は0.1%と、平年(0.1%)並であった。なお、果実での発生は認められなかった。

(7) なし・赤星病

平年並の4月6半旬より発生を認め、6月3半旬まで発生圃場率が12.5～87.5%と、平年(28.8～85.0%)並であったが、発病葉率は0.1～6.6%と、平年(3.9～10.3%)に比べてやや低かった。

(8) なし・うどんこ病

平年よりやや遅い7月3半旬より発生を認め、10月3半旬まで発生圃場率が12.5～100%、葉の発病程度が0.0～17.0と、平年(5.0～100%, 0.0～23.2)並であった。

(9) なし・ナシヒメシンクイ

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

また、フェロモントラップへの誘殺は、平年並に推移した。

(10) なし・ハダニ類

平年よりやや遅い 6 月 6 半月より発生を認め、10 月 3 半月まで発生圃場率が 25.0~100%、寄生葉率が 0.3~10.3%と、平年(16.3~66.8%, 1.0~14.2%)並であった。

(11) なし・アブラムシ類

平年並の 5 月 3 半月より発生を認め、6 月 6 半月まで発生圃場率が 12.5~62.5%、寄生新梢率が 0.4~14.0%と、平年(28.8~42.5%, 2.4~5.6%)に比べてやや高かった。

(12) かき・炭そ病

3 月の越冬病斑及び 5 月以降の新梢における発生は認められなかった。また、果実での発生も認められなかった。

(13) かき・チャノキイロアザミウマ

平年より遅い 8 月 6 半月に発生を認め、発生圃場率が 0~50%、被害果率が 0~0.8%と、平年(3.3~8.3%, 0.1~0.3%)に比べてやや高かった

(14) キウイフルーツ・かいよう病

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

4. 野菜

(1) サツマイモ・アブラムシ類

平年並の 5 月 6 半月より発生を認め、7 月 3 半月まで発生圃場率が 12.5~85.7%、寄生株率が 0.8~13.7%と、平年(33.5~58.9%, 4.2~15.9%)並であった。

(2) サツマイモ・ハスモンヨトウ

6 月 6 半月から 7 月 6 半月まで発生は認められなかった(平年は発生圃場率が 1.3~6.9%、生息虫数が 0~0.1 頭)。その後、平年より遅い 8 月 3 半月に発生を認め、発生圃場率が 6.3%、生息虫数が 0.1 頭と、平年(1.3%, 0.0 頭)に比べてやや高かった。

フェロモントラップへの誘殺総数は、5 月から 8 月まで 964 頭と、平年(1,138 頭)並に推移した。

(3) サツマイモ・シロイチモジヨトウ

平年よりやや遅い 7 月 3 半月に発生を認め、発生圃場率が 6.3%、生息虫数が 0.1 頭と、平年(11.1%, 0.3 頭)に比べてやや低かった。その後 8 月 3 半月まで発生は認められなかった。

フェロモントラップへの誘殺数は、5 月 1 半月から 8 月 6 半月まで 2,933 頭と、平年(3,455 頭)並に推移した。

(4) サツマイモ・ナカジロシタバ

平年よりやや遅い 7 月 3 半月より発生を認め、8 月 3 半月まで発生圃場率が 6.3~25.0%、生息虫数が

0.1~0.7 頭と、平年(18.4~19.3%, 0.4~0.8 頭)並であった。

(5) サツマイモ・ハダニ類

平年並の 5 月 6 半月より発生を認め、8 月 3 半月まで発生圃場率が 0~43.8%、寄生株率が 0~8.1%と、平年(9.8~65.0%, 0.9~14.5%)に比べてやや低かった。

(6) 冬春トマト・疫病(令和 4 年度産)

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(7) 冬春トマト・灰色かび病(令和 4 年度産)

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(8) 冬春トマト・葉かび病(令和 4 年度産)

平年より遅い 2 月 6 半月に発生を認め、発生圃場率が 12.5%、発病度が 0.6 と、平年(0.0%、0.0)に比べてやや高かったが、その後、発生は認められなかった。

(9) 冬春トマト・タバココナジラミ(令和 4 年度産)

平年並の 10 月 6 半月に発生を認め、発生圃場率が 100%、寄生葉率が 22.3%と、平年(58.2%, 5.3%)に比べて高く、過去 10 年と比較して最も高かったため、令和 4 年 11 月 1 日付けで注意報を発令した。その後、4 月 6 半月まで発生圃場率が 75.0~87.5%、寄生葉率が 8.3~19.4%と、平年(37.8~59.5%, 1.6~5.5%)に比べて高かった。多発生の要因として、令和 4 年 11 月の平均気温が平年に比べて高く、露地からの侵入リスクが長期にわたったことが影響したと考えられた。

(10) 夏秋ナス・うどんこ病

平年より遅い 8 月 6 半月に発生を認め、発生圃場率が 37.5%、発病葉率が 4.4%と、平年(53.6%, 5.4%)並であった。

(11) 夏秋ナス・ハスモンヨトウ

平年よりやや遅い 7 月 3 半月より発生を認め、8 月 6 半月まで発生圃場率が 50.0~75.0%、被害度が 2.0~3.0 と、平年(6.0~20.1%, 0.2~1.0)に比べて高かった。

果実では、7 月 3 半月より発生を認め、8 月 6 半月まで発生圃場率が 12.5~25.0%、被害果率が 0.3~1.3%と、平年(5.6~9.7%, 0.2~0.3%)に比べてやや高かった。

6 月から 8 月のフェロモントラップへの誘殺数は、平年並に推移した。

(12) 夏秋ナス・ミナミキイロアザミウマ

平年並の 6 月 6 半月より発生を認め、7 月 6 半月まで発生圃場率が 25.0~75.0%、寄生葉率が 0.3~

4.0%と、平年(52.5～53.7%, 2.5～7.1%)並であった。その後、8月6半旬には発生は認められなかった。

果実では6月6半旬より発生を認め、7月6半旬まで発生圃場率が25.0～42.9%、被害果率が1.0～1.3%と、平年(1.4～27.0%, 0.0～2.5%)に比べてやや高かった。

(13) 夏秋ナス・アブラムシ類

平年並の6月6半旬より発生を認め、8月6半旬まで発生圃場率が0～42.9%、1葉当たりの寄生虫数が0～4.3頭と、平年(5.2～27.1%, 0.0～0.3頭)に比べてやや高かった。

(14) 夏秋ナス・オオタバコガ

平年並の6月6半旬より卵の産下を認め、7月3半旬まで発生圃場率が12.5～14.3%、産下卵率が0.1%と、平年(18.1～34.9%, 0.3～0.8%)に比べてやや低かった。

果実では、平年よりやや遅い7月3半旬より発生を認め、8月6半旬まで発生圃場率が0～28.6%、被害果率が0～0.9%と、平年(4.2～7.3%, 0.0～0.1%)に比べてやや高かった。

6月から8月のフェロモントラップへの誘殺数は、ほぼ平年並に推移した。

(15) 冬春ナス・うどんこ病(令和4年度産)

平年より遅い12月4半旬に発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が0～33.3%、被害葉率が0～0.3%と、平年(1.4～33.3%, 0.0～1.7%)並であった。

(16) 冬春ナス・灰色かび病(令和4年度産)

葉での発生は、巡回調査圃場においては認められなかった。

果実では、平年並の12月4半旬より発生を認め、2月6半旬まで発生圃場率が0～16.7%、発病果率が0～0.2%と、平年(2.9～11.7%, 0.0～0.2%)並であった。その後は、4月6半旬まで発生は認められなかった。

(17) 冬春ナス・すすかび病(令和4年度産)

平年並の10月6半旬より発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が16.7～50.0%、発病葉率が0.3～8.7%と、平年(2.9～72.1%, 0.1～10.8%)並であった。

(18) 冬春ナス・ミナミキイロアザミウマ(令和4年度産)

平年並の10月6半旬より発生を認め、11月6半旬まで発生圃場率が16.7%、寄生葉率が0.2～1.5%と、平年(58.8～60.0%, 8.2～11.9%)に比べて低かった。その後は、4月6半旬まで発生は認められなかった。

果実では、平年並の10月6半旬より発生を認め、3月4半旬まで発生圃場率が0～33.3%、被害果率が0～4.3%と、平年(11.9～23.3%, 0.6～1.6%)並の発生であった。その後は、4月6半旬まで発生は認められなかった。

(19) 冬春ナス・タバココナジラミ(令和4年度産)

平年並の10月6半旬より発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が66.7～100%、寄生葉率が15.0～33.8%と、平年(33.8～86.4%, 3.8～15.9%)に比べてやや高かった。

(20) 冬春ナス・ハダニ類(令和4年度産)

平年より遅い2月6半旬より発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が16.7%、寄生葉率が0.2～2.8%と、平年(6.0～14.0%, 0.3～0.7%)並であった。

(21) 冬春キュウリ・べと病(令和4年度産)

平年並の12月4半旬より発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が28.6～62.5%、発病葉率が0.9～8.6%と、平年(17.1～84.3%, 1.1～20.3%)並であった。

(22) 冬春キュウリ・うどんこ病(令和4年度産)

平年より遅い1月6半旬より発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が11.1～22.2%、発病葉率が0.1～0.8%と、平年(44.4～67.5%, 3.9～8.5%)に比べてやや低かった。

(23) 冬春キュウリ・褐斑病(令和4年度産)

平年より遅い2月6半旬より発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が11.1～37.5%、発病葉率が0.2～14.1%と、平年(48.9～57.5%, 7.2～15.2%)並であった。

(24) 冬春キュウリ・ミナミキイロアザミウマ(令和4年度産)

平年より遅い3月4半旬より発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が11.1～37.5%、寄生葉率が0.2～6.3%と、平年(38.5～52.5%, 5.4～11.7%)に比べてやや低かった。

果実では、平年より遅い3月4半旬より発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が11.1～25.0%、被害果率が0.2～0.8%と、平年(6.9～10.0%, 0.3～1.1%)並であった。

(25) 冬春キュウリ・タバココナジラミ(令和4年度産)

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(26) 夏ネギ・さび病

平年並の4月6半旬より発生を認め、5月6半旬まで発生圃場率が11.1～33.3%、被害株率が0.2～

1.1%と、平年(11.4~23.8%, 1.0~5.3%)並であった。

(27) 夏ネギ・べと病

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(28) 夏ネギ・ネギアザミウマ

平年並の4月6半旬に発生を認め、5月6半旬まで発生圃場率が77.8~88.9%、被害度が2.9~7.4と、平年(84.9~94.1%, 5.6~11.4)並であった。

(29) 秋冬ネギ・黒斑病

平年並の7月6半旬より発生を認め、9月6半旬まで発生圃場率が0~11.1%、発病度が0~0.2と、平年(4.9~12.2%, 0.1~0.2)並であった。

(30) 秋冬ネギ・ネギアザミウマ

平年並の7月6半旬より発生を認め、9月6半旬まで発生圃場率が44.4~66.7%、被害度が1.0~5.1と、平年(34.4~52.5%, 1.2~1.8)並であった。

(31) 秋冬ネギ・ネギハモグリバエ

平年よりやや遅い8月6半旬に発生を認め、発生圃場率が11.1%、被害度が0.1と、平年(70.0%, 8.4)に比べて低かった。

(32) 秋冬ネギ・シロイチモジヨトウ

平年並の7月6半旬より発生を認め、9月6半旬まで発生圃場率が22.2~44.4%、寄生株率が0.7~2.0%と、平年(30.3~63.9%, 1.2~5.7%)並であった。

また、7月から9月のフェロモントラップへの誘殺数は、平年並で推移した。

(33) 冬春ホウレンソウ・べと病(令和4年度産)

平年並の1月6半旬より発生を認め、3月4半旬まで発生圃場率が9.1~22.2%、被害度が0.1~0.5と、平年(3.3~19.3%, 0.2~1.7)並であった。

(34) 冬春ホウレンソウ・アブラムシ類(令和4年度産)

平年よりやや遅い11月6半旬に発生を認め、3月4半旬まで発生圃場率が9.1~33.3%、株当たり寄生虫数が0.0頭と、平年(24.8~47.5%, 0.1~0.2頭)並であった。

(35) 冬春イチゴ・うどんこ病(令和4年度産)

葉では、平年よりやや遅い11月6半旬より発生を認め、3月4半旬まで、発生圃場率が0~8.3%、発病葉率が0~0.9%と、平年(2.9~5.7%, 0.1~0.2%)並であった。

果実では、平年並の12月4半旬より発生を認め、3月4半旬まで発生圃場率が0~15.4%、発病果率が0~0.9%と、平年(0.8~3.6%, 0.0~0.2%)に比べてやや高かった。

(36) 冬春イチゴ・炭疽病(令和4年度産)

簡易エタノール噴霧法で炭疽病菌の潜在感染検定を実施した結果、7月3半旬の子苗で潜在感染圃場率が75.0%、感染株率が0~63.2%であった。

育苗圃場では8月6半旬に発生を認め、発生圃場率が33.3%、発病株率が1.0%と、平年(8.5%, 0.8%)に比べてやや高かった。

本圃では巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(37) 冬春イチゴ・アブラムシ類(令和4年度産)

平年よりやや遅い10月6半旬より発生を認め、3月4半旬まで発生圃場率が7.1~15.4%、寄生株率が0.8~6.8%と、平年(21.6~28.1%, 2.8~5.3%)に比べてやや低かった。

(38) 冬春イチゴ・ハダニ類(令和4年度産)

育苗後半の8月6半旬に発生を認め、発生圃場率が25.0%、寄生株率が1.7%と、平年(38.6%, 6.5%)並であった。

本圃では平年よりやや遅い10月6半旬より発生を認め、3月4半旬まで発生圃場率が15.4~38.5%、寄生株率が0.3~2.0%と、平年(23.9~66.7%, 3.6~18.3%)に比べてやや低かった。

(39) 冬春イチゴ・アザミウマ類(令和4年度産)

平年よりやや遅い1月6半旬より発生を認め、3月4半旬まで発生圃場率が15.4~35.7%、寄生花率が0.2~3.1%と、平年(7.1~42.9%, 0.2~3.3%)並であった。

令和5年度 主要病害虫発生状況(徳島県)

単位：ha

作物名(作付面積) 病害虫名	発生面積	摘 要	作物名(作付面積) 病害虫名	発生面積	摘 要
早期水稲 (3,780)			かき (211)		
葉いもち	2,100	並	炭そ病	0	やや少
穂いもち	1,470	並	うどんこ病	106	やや少
紋枯病	840	並	角斑落葉病	178	並
黄化萎縮病	210	やや多	円星落葉病	71	並
ニカメイガ	0	並	カメムシ類	71	並
セジロウンカ	2,940	並	冬春トマト※2 (37)		
トビイロウンカ	0	並	疫病	0	やや少
ツマグロヨコバイ	1,680	並	灰色かび病	0	やや少
イネクロカメムシ	0	並	葉かび病	5	並
斑点米カメムシ類	1,680	並	タバココナジラミ	35	やや多
コブノメイガ	0	並	夏秋ナス (77)		
イネミズゾウムシ	1,890	並	うどんこ病	30	並
イチモンジセセリ	210	並	ミナミキイロアザミウマ	55	やや多
普通期水稲 (6,120)			オオタバコガ	20	並
葉いもち	3,194	並	ハスモンヨトウ	55	やや多
穂いもち	2,448	並	ハダニ類	55	やや多
紋枯病	2,928	並	ニジュウヤホシテントウ類	65	やや多
ごま葉枯病	1,224	やや多	冬春ナス※2 (14)		
縞葉枯病	0	やや少	灰色かび病	3	並
稲こうじ病	534	並	うどんこ病	5	並
セジロウンカ	2,927	やや少	すすかび病	7	並
トビイロウンカ	0	並	ハダニ類	3	並
ツマグロヨコバイ	2,520	やや少	ミナミキイロアザミウマ	5	並
イネクロカメムシ	0	並	冬春キュウリ※2 (28)		
斑点米カメムシ類	5,324	並	べと病	18	並
コブノメイガ	720	少	うどんこ病	7	やや少
イネミズゾウムシ	1,020	並	灰色かび病	0	やや少
イチモンジセセリ	0	やや少	褐斑病	11	並
さつまいも (1,090)			アブラムシ類	4	並
ナカジロシタバ	273	並	ミナミキイロアザミウマ	11	やや少
イモキバガ	137	少	夏ネギ (67)		
ハダニ類	478	並	べと病	0	並
タバココナジラミ	342	並	さび病	20	並
かんきつ※1 (1,045)			ネギアザミウマ	61	並
そうか病	392	並	秋冬ネギ (125)		
黒点病	574	やや少	べと病	0	並
かいよう病	292	並	さび病	0	並
アブラムシ類	327	やや少	ネギアザミウマ	84	並
ミカンハダニ	654	並	冬春ホウレンソウ※2 (374)		
ミカンハモグリガ	654	並	べと病	84	並
なし (200)			アブラムシ類	125	並
黒星病	25	並	シロオビノメイガ	32	並
赤星病	175	並	冬春イチゴ※2 (73)		
うどんこ病	200	並	炭そ病	26	並
カメムシ類	0	並	うどんこ病	12	並
ナシヒメシンクイ	0	並	灰色かび病	0	やや少
ハダニ類	200	並	アブラムシ類	12	やや少
アブラムシ類	125	やや多	ハダニ類	29	やや少
			アザミウマ類	27	並
			ハス (520)		
			褐斑病	520	やや多
			ハスモンヨトウ	295	やや少

※1 温州みかん, スダチに限る。 ※2 令和4年度産